

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 12 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22520391

研究課題名(和文) 構文理論・用法基盤アプローチによる語彙と構文彙の統合的研究

研究課題名(英文) An Integrated Study of Lexicon and Constructicon: A Usage-based Construction Grammar Approach

研究代表者

藤井 聖子 (FUJII, Seiko)

東京大学・総合文化研究科・教授

研究者番号：70165330

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円、(間接経費) 870,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、構文理論および用法基盤モデルに基づき、コーパス分析を通して、「語彙と構文彙」両者の統合的知識を理論的かつ実証的に探究した。「構文彙」は、“constructicon”(Fillmore)の本研究課題における邦訳術語である。代表的事例研究として、(1)英語と日本語の分離動詞、特にBREAK CUT、こわす、切る、わる、おる等の項構造構文の字義の意味、及び比喩的意味拡張を分析した。(2)条件構文における語彙と構文の分析や、(3)引用助詞「と」が標識する「語彙と構文彙」を分析した。これらに基づき、第一言語・第二言語習得においても「語彙と構文彙」統合的知識の習得に関する研究を進めた。

研究成果の概要(英文)：The integrated study of "lexicon and constructicon" has explored the interplay between the lexicon and grammatical constructions, examining a set of lexical items and the grammatical constructions in which these lexical items participate. The term "constructicon (Fillmore et al. 2012) refers to a language's inventory of constructions (analogous to lexicon). To this end, drawing on various corpus data as well as considering theoretical issues, representative empirical analyses have been carried out, including (1) verbs of separation in English (cut, break, etc.) and Japanese (kowasu, kiru, waru, oru, etc.), and the frames that these lexical items evoke and argument structure constructions featuring these lexemes (Fujii et al. 2013a, 2013b); (2) grammatical constructions and the lexicon involved in conditionals (Fujii 2013a, 2013b); and (3) various types of TO quotative constructions in Japanese and the lexemes that evoke the constructions (Fujii 2010, 2011, 2012, in press 2014, etc.).

研究分野：言語学(語用論、意味論、言語獲得論)

科研費の分科・細目：言語学、言語学

キーワード：構文理論 Construction Grammar 用法基盤アプローチ Usage-based 構文彙 constructicon フレーム意味論 分離動詞 separation verbs 接続構文・条件構文 引用構文 語彙と構文彙

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、構文理論 (Construction Grammar: Fillmore 1988, 1989, Fillmore, Kay & O'Connor 1988, Goldberg 1995, Kay & Fillmore 1999, Michaelis & Lambrecht 1996, Östman & Fried 2004, etc.) 及び、同様に「構文」という概念・単位を軸にする用法基盤モデル (Usage-based Model: Langacker 2000, Kemmer & Barlow 2000) における言語観・文法観に基づく。語彙知識と構文知識との連続性を重視し、言語の規則的な部分と構文項目ごとに個別的・定型的な部分との両者に着目する。また、言語使用・用法に依存した文法化を捉える。

本研究開始当初までに、**構文理論・用法基盤モデル**に関して、自ら行う日英語構文の分析に加え、総説・解説論文を執筆し(藤井 2001, 2003 等)、同理論的アプローチでの言語獲得論の総説を執筆し(藤井 2001, 2002 等)、さらに、国際学会や学会シンポジウムでの招待講演(国際構文理論学会 2005 等)や、国際学会の企画・運営を行い、国際的連携での研究活動を行ってきた。

語彙知識と構文知識との統合を重視するこれらの視座は、**子供の言語獲得**でも重要であることが示されている(Tomasello 2001; Goldberg 2006; 藤井 2002,.)。

構文理論の語彙部門は、同じくフィルモア氏が提唱してきた**フレーム意味論**(Fillmore 1982, 1999, etc.) において研究が進められてきており、フレーム意味論に基づく英語の語彙情報資源が、フレームネット(FrameNet)プロジェクトにおいて構築されてきた。研究代表者はこれまでに、フレーム意味論・フレームネットに関する総説(藤井&小原 2003)を執筆し、パークレーのフレームネットプロジェクトと密接な共同研究を継続してきた。さらに、日本語において同様の語彙情報資源を構築するための日本語フレームネット(研究代表者:小原京子)に参加し、国立国語研究所が主導指揮する特定領域研究『日本語コーパス』でもメンバーとして研究活動を行ってきた。これらの先行する共同研究活動において、適切かつ有益な連携共同体制が築かれているとともに、これらの先行共同プロジェクトを通して、構築における(精緻な統一のアノテーション等が)困難な点や不足している言語分析領域(語彙・構文等)が明確に把握できるようになってきた。本研究課題での研究では、まさにこれらの先行共同プロジェクトにおいて困難であることが明確になった残された問題・言語現象に焦点をあてた。

## 2. 研究の目的

本研究では、構文理論および用法基盤モデルに基づき、言語知識における「語彙」知識と「構文」知識とを乖離した知識と見なさず両者の統合現象に着目し、言語使用・言語獲得・学習のコーパスデータを用いた分析を通して、「語彙と構文」両者の統合的知識を理論的かつ実証的に探究した。

本研究では、構文知識に関して、(語彙知識同様に)構文間の繋がり・関係に着目し、構文の有機的集合体を捉える。本研究課題「構文理論・用法基盤アプローチによる語彙と構文の統合的研究」における「構文彙」という用語は、Fillmore (2006), Fillmore, Lee-Goldman, & Rhodes (2010) が、構文の有機的集合体(語の集合体としての「語彙」概念同様)に関して提唱した“constructicon”の、本研究課題研究代表者による日本語訳での術語である(藤井 2010 等参照)。

本研究のこの全体構想の中で軸となる目的は以下である:

目的 1. 「語彙と構文」の統合的知識を分析し解明するための理論的考察を深めつつ、コーパスデータを用いて、日本語における「語彙と構文」両者の統合的知識を分析・記述する代表的事例研究を行うこと;

目的 2. 構文知識に関して、構文間の関係を分析し明らかにし、構文の有機的集合体を分析・記述すること;

「語彙と構文彙」の事例研究に基づき、「語彙と構文彙」統合知識の類型を探求しつつ、「語彙と構文彙」記述・分析のデザインを考案すること;

目的 3. 「語彙と構文彙」統合的知識の習得・学習に関する事例研究を、子供の第一言語獲得、及び、第二言語としての日本語習得において行い、「語彙と構文」統合的知識を動的に捉え実証的に考察すること、である。

目的1に関しては、特に(A) 動詞や形容詞等述語の項構造構文、(B) 「支援動詞構文」、等における動詞と名詞句の慣用的連結、(C) 節接続構文(特に、引用構文や条件等)、において「語彙と構文」の事例研究を展開した。目的2・目的3は、目的1の分析に基づき進めた。

## 3. 研究の方法

上記「研究の目的」欄で述べた目的を遂行するために、理論的考察を深め分析の枠組みを明確化しつつ、目的1の具体的な目的として

挙げた事例研究課題を中心に、『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』(国立国語研究所)を主に用いて、「語彙と構文」の分析・記述を進めた。大規模の書き言葉コーパスを用いた分析に加え、話し言葉のデータ(研究代表者が先行研究において収集・構築した会話コーパス・語りコーパス;日本語話しことばコーパス(国立国語研究所);テレビ番組・ニュースの録画データ)の分析も行い、書き言葉と話し言葉両者の違いも考慮にいった。

「語彙と構文」のそれぞれの対象現象に関して、コーパス分析を行った上で(目的1)、代表的用例に語彙・構文情報のアノテーションを付与し、語彙群および構文群の分類を作成するとともに、構文間の関係を分析し、構文彙“constructicon”の雛形を考察した(目的2)。これらの研究を進める上で、カリフォルニア大学バークレーの国際情報学研究所において構築された英語のFrameNet語彙情報資源に加え、同研究所で構築中の構文彙“constructicon”を参照し、日英語の比較対照を射程に入れつつ、日本語を中心に分析を行う。また日本語フレームネットで構築中の語彙情報資源との連携を保ちつつ、構文彙“constructicon”の言語学的分析を進めた。

目的1・目的2で分析・記述する「語彙と構文」事例に焦点を合わせて、目的2の習得・学習の分析を進めた。1・目的2での事例分析に即し、その知見を援用して、目的3を進めた。

#### 4. 研究成果

「語彙と構文」の統合的知識を分析し解明するための理論的考察を深めつつ、コーパスデータを用いて、日英語における「語彙と構文」両者の統合的知識を分析・記述する代表的な事例研究を行った。

代表的事例研究として、(1)英語と日本語の分離動詞、特にBREAK CUT、こわす、切る、わる、おる等の項構造構文の字義的意味、及び比喩的意味拡張を分析した。(2)条件構文における語彙と構文の分析や、(3)引用助詞「と」が標識する「語彙と構文彙」を分析した。(4)これらに基づき、第一言語習得・第二言語習得においても「語彙と構文」統合的知識の習得に関する研究を進めた。

(1) フレーム意味論と構文理論に基づく語彙意味論・項構造構文の分析として、英語と日本語における分離動詞の研究を展開した。

特にBREAK CUT「こわす」「切る」「わる」「おる」等の語彙の形成する構文を分析し、まず、(1A)字義的・物理的意味の分析し、さらに(1B)比喩的意味拡張の分析を進めた。この一連の研究は、分離の意味範疇を射程とする多義性の分析であり、類義語の分析である。またそれらの日英語対照である。同時に、マックスプランク心理言語学研究(オランダ)で行われた多くの言語の類型論的実験研究を参照点として考察しつつ進めたため、日本語日英語対照)の分析から類型論的研究に資する研究成果・論考も得ることができた。

(1A)字義的・物理的意味の分析に関して、Conceptual Structure, Discourse, and Language において、発表した(Fujii *et al.* 2012)。この研究成果が出版に至った(Fujii *et al.* 2013)。さらに、(1B)比喩的意味拡張の分析の成果を、国際認知言語学会(カナダ・アルバータ、2013年6月)にて発表した。

(2)節接続構文の語彙と構文の分析に関して、構文理論国際学会(2012, 8月韓国ソウル)や国際語用論学会(2011年7月イギリス・マンチェスター)等において、条件構文の多機能性や語彙との関連等を発表した。さらに、語彙と構文の分析の観点から、特に発話動詞と共起する条件構文に着目し、談話標識として用いられる条件構文を分析した。この研究成果を、国立国語研究所「コーパス日本語学ワークショップ」(2013年9月)で発表し論集で公開した。さらに、発展的研究成果を『言語、情報、テキスト』等で刊行した。また、非内容的条件構文に関しての研究の成果を、国際言語学会者会議(2013年7月、スイスジュネーブ)で発表した。

(3)引用助詞「と」が標識する「語彙と構文彙」を、大規模均衡コーパスを用いて展開した。その分析の成果の一部を『現代日本語書き言葉均衡コーパス』完成記念講演会論文集』(2011)や、藤井(2010)(2010)等で成果の一部を発表した。また、英語でも、国際学会、構文理論国際学会(2010, 9月チェコ、プラハ)や Japanese/Korean Linguistics 学会(2012, NINJAL, 東京)等において、発表した。その一部用法に関して、Japanese/Korean Linguistics Volume 22において公刊される Fujii (in press 2014) の校閲を済ませた。

さらに、(3)との関連で、in that構文の分析を行い(Lee-Goldman & Fujii)、英語のadjunctの項構造構文との関係の分析を進めた。同時に、「語彙と構文彙」の統合的知識を分析するための理論的考察にも繋げた。

(4) 第一言語獲得・第二言語習得においても、研究室の博士論文・修士論文として「語彙と構文」統合的知識の習得・学習に関する事例研究を進めた。(該当分野で修士論文が7編修了；博士論文が2編修了、博士論文5編進行中)。日本語教育においても、日本語教科書(中級から上級)『Active Learning in JSL テーマで考え議論する日本語』(藤井編著)のテキストを用いて「構文と語彙」の教材開発を行い、既存の教科書や分析で十分記述されていない構文の分析と「構文彙」の構築を進めた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 8 件)

1. 藤井聖子 2013. 「現代日本語における条件構文基盤の談話標識(化) -- その形式と機能の類型試案 --」専攻紀要『言語・情報・テキスト Language, Information, Text Vol. 20 2013』pp. 87-101. 査読無
2. 藤井聖子 2013. 「条件構文の談話標識化の諸相」『コーパス日本学 4 (コーパス日本学ワークショップ予稿集)』pp. 27-34. 国立国語研究所. 査読無
3. Houck, Noel & Seiko Fujii. 2013. Working through disagreement in English academic discussions between L1 speakers of Japanese and L1 speakers of English. In T. Greer, D. Tatsuki, & C. Roever (Eds.), *Pragmatics and Language Learning*, 13 (pp. 91-118). Honolulu, Hawai'i: University of Hawai'i. 査読有
4. Satoru Uchida & Seiko Fujii 2011. A frame-based approach to connectives. *Constructions and Frames* 3:1 (2011), 128-154. 査読有
5. Seiko Fujii & Noël Houck 2011. Trajectories of Disagreement Sequences in Academic Argument in English by Native Speakers of English and Native Speakers of Japanese. *Language Information Text* Vol. 18. 査読無
6. 藤井聖子 2011. 「BCCWJを用いた引用節(句)を含む構文の分析」『「現代日本語書き言葉均衡コーパス」完成記念講演会論文集』国立国語研究所編 141-146. 査読無
7. 藤井聖子 2010. 「BCCWJを用いた語彙・構文彙の分析—所謂引用助詞「と」が標識する構文の場合—」『特定領域研究「日本語コーパス」平成22年度公開ワークショップ 研究成果 論文集』, 521-528. 国立国語研究所. 査読無
8. 藤井聖子 2010. 「引用ト節(句)と共起する語彙と構文 —BCCWJコーパスに基づく語彙・構文彙の構築に向けて—」『言語処理学会第16回年次大会発表論文集』, 450-453. 言語処理学会. 査読無

[学会発表] (計 19 件)

1. Fujii, Seiko. 2014. From reduced, integrated to complex constructions in acquiring conditionals in Japanese. A paper presented at GURT Georgetown University Round Table on Language and Linguistics. 2014 March 16. [refereed]
2. Fujii, Seiko. 2013. Non-predictive conditionals: Semantics and Pragmatics of Logical Words. A paper presented at the International Congress of Linguists: CIL. U of Geneva. July, 2013. [refereed]
3. Noel Houck & Seiko Fujii. 2013. Closing Disagreement Sequences in Academic Discussions. Presented at the American Association for Applied Linguistics 2013 Conference, Dallas, Texas, U.S.A. March, 2013. [refereed]
4. Fujii, Seiko. 2012. A Corpus-based Analysis of Adverbial Uses of the Quotative TO Construction: Speech and thought representation without speech or thought predicates. Presented at the 22<sup>nd</sup> international conference Japanese/Korean Linguistics. October, 2012. [refereed]
5. Fujii, Seiko. 2012. Insubordination of Conditional Constructions in Japanese. Presented at the International Symposium "Dynamics of Insubordination", Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies. October, 2012.

6. Fujii, Seiko. 2012. Non-predictive conditional constructions in Japanese. Presented at the 7th International Conference on Construction Grammar, Hankuk University of Foreign Studies, Seoul, Korea. August, 2012. [refereed]
  7. Fujii, Seiko, Paula Radetzky, & Eve Sweetser. 2012. A Multi-Frame Analysis of Separation Verbs. Presented at the 11<sup>th</sup> Conceptual Structure, Discourse, and Language Conference. University of British Columbia, Canada. May, 2012. [refereed]
  8. Russell Lee-Goldman & Seiko Fujii (発表者). 2012. Argument structure satisfaction via unselected adjuncts. Presented at the 7th International Conference on Construction Grammar, Hankuk University of Foreign Studies, Seoul, Korea. August, 2012. [refereed]
  9. Fujii, Seiko. 2011. Epistemic conditional constructions in Japanese: Linguistic manifestation of the speaker's reasoning. A paper presented at the 12<sup>th</sup> International Pragmatics Conference in Manchester, U.K., 3-8 July. [refereed]
  10. Fujii, Seiko. 2010. A construction for speech and thought representation without speech or thought predicates in Japanese. A paper presented at the 6th International Conference on Construction Grammar. Charles University, Prague, Czech Republic, September 3-5. [refereed]
  11. Fujii, Seiko. 2010. A grammatical device for 'logophoricity' in Japanese: the quotative TO construction used as a clause-external adverbial. A paper presented at the 4<sup>th</sup> Conference on Language, Discourse and Cognition. National Taiwan University, Taipei. April 30-May 2. [refereed]
  12. Fujii, Seiko. & Noël Houck. 2010. Negotiating Responses to Disagreement in Academic Discussion. A paper presented at the 18th International Conference on Pragmatics and Language Learning, July 16-19. [refereed]
  13. Lee-Goldman, Russel & Seiko Fujii (発表者) 2010. Constructions for elaboration and specification in English and Japanese. A paper presented at the 6th International Conference on Construction Grammar. Charles University, Prague, Czech Republic, September 3-5. [refereed]
  14. Lee-Goldman, Russel & Seiko Fujii. 2010. Frame Semantics in Sign-based Construction Grammar. A paper presented at the Joint meeting of CSDL and ESLP (Conceptual Structure, Discourse, and Language Conference; Embodied and Situated Language Processing Workshop), University of California, San Diego, U.S.A. (Lee-Goldman, Russell & Seiko Fujii.) September 16-19. [refereed]
  15. Noël Houck & Seiko Fujii. 2010. Responses to Elicited First Opinions in Academic Discussion by NSEs and NSJs. A paper presented at the American Association for Applied Linguistics 2010 conference in Atlanta, Georgia, March 6-9. [refereed]
  16. 藤井聖子 2013「条件構文の談話標識化の諸相」コーパス日本語ワークショップ 2013.9.5. 国立国語研究所.
  17. 藤井聖子 2011. 「BCCWJ を用いた引用節(句)を含む構文の分析」『「現代日本語書き言葉均衡コーパス」完成記念講演会』
  18. 藤井聖子 2010. 「BCCWJを用いた語彙・構文彙の分析—所謂引用助詞「と」が標識する構文の場合—」『特定領域研究「日本語コーパス」平成22年度公開ワークショップ研究成果発表会』
  19. 藤井聖子 2010. 「引用ト節(句)と共起する語彙と構文 —BCCWJコーパスに基づく語彙・構文彙の構築に向けて—」言語処理学会第16回年次大会. 言語処理学会.
- [図書] (計 8 件)
1. Fujii, Seiko. (in press 2014) A corpus-based analysis of adverbial uses of the quotative TO construction: Speech and thought representation without speech or thought predicates. Japanese/Korean Linguistics. Volume 22. Stanford: CSLI Publications. [refereed]

2. Fujii, Seiko, Paula Radetzky, & Eve Sweetser. 2013. A multi-frame analysis of separation verbs. In Borkent, Michael, Barbara Dancygier, and Jennifer Hinnell (eds.), *Language and the Creative Mind. Conceptual Structure, Discourse, and Language*. pp. 137-153. Stanford: CSLI Publications. [refereed]
3. Fujii, Seiko, Paula Radetzky, & Eve Sweetser 2013. SPLITTING, CUTTING, and BREAKING talk in Japanese.. A paper presented at the International Cognitive Linguistics Conference. University of Alberta. Canada. [web publication]
4. Uchida, Satoru & Seiko Fujii 2013. “A frame-based approach to connectives” *Advances in Frame Semantics*, Fried, Mirjam and Kiki Nikiforidou (eds.) [BCT 58] pp. 133-158 ohn Benjamins Publishing Company. [refereed]
5. Hasegawa, Yoko, Russell Lee-Goldman, Kyoko Ohara, Seiko Fujii and Charles J. Fillmore. 2010. On expressing measurement and comparison in English and Japanese. In *Contrastive Studies in Construction Grammar*, Boas, Hans C. (ed.), 169–200. John Benjamins Publishing Company. [refereed]
6. (編著) 藤井聖子 2014, 2013, 2012, 2011, 2010. 『Active Learning in JSL. テーマで考え議論する日本語』（教科書学内版）「語彙と構文」
7. 藤井聖子 2012 「条件構文をめぐって」『構文の意味』澤田治美編 pp. 107-131. ひつじ書房
8. 藤井聖子 2010. 「言語獲得論 — 用法基盤・構文理論的アプローチ」『言語と哲学・心理学』（シリーズ言語の可能性 9 卷）遊佐典昭編 143 - 171. 朝倉出版

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

藤井 聖子 (FUJII, Seiko)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：70165330